

6 海外プログラム事業部（国際協力、国際支援）

コーディネーター総括

2017年度も、前年度に引き続き「食糧問題」「ジェンダー」そして「格差」に焦点をあてた活動を行った。活動にご支援、ご協力いただいた皆さまに、まずはお礼を申し上げたい。

今年度は、本セクションの活動で大きな位置をしめていた海外へのスタディツアーが実施できなくなり、学生たちにとって、「どういう活動をするか」を模索する1年となってしまったことは否めない。しかし、後述のように、そのおかげで学生たちが地域で子どもたちを対象にワークショップを行うなど、国内外の問題について学ぶだけでなく「伝えたいことが相手に伝わる」には、「聞き手」を意識した学びや発信が大切であること気づけたのではないだろうか。

そのほか、(公財) プラン・インターナショナル・ジャパン（以下、「プラン」）の活動支援としての未使用はがきの回収・寄付プロジェクトも休止した。このはがき回収プロジェクトは、海外プログラム事業部の「ガールズ・プロジェクト」の一環で参加してきた。従来は、プランが指定する複数のプロジェクトから女性・女兒に関するプロジェクトを一つ選んでそのプロジェクトに少しでも多く寄付できるように、はがきを回収し、最終的には金券を換金して寄付してきた。しかし、今年度は、支援プロジェクトを指定できなくなり、こちらの学生の人数も多くないことから、すべてのプロジェクトを学びながらはがきを回収することが難しくなってしまう、寄付には意義があるものの、大学でこの活動をする意義を考える「学び」の効果が弱まってしまふことが懸念されたため、休止となった。2018年度はどうするか、プランのご担当者や学生たちとも相談して検討したい。

学生たちが大いに学びを得た活動もある。一つは、継続して行っている「ペットボトルキャップ回収」活動に関連した、学習会の開催である。ペットボトルキャップを学内で集めており、回収されたキャップは「誰の手に渡ってどのようにワクチンが調達されるのか」という事実の確認だけではなく、「キャップを回収するということは、ペットボトルは生産・消費され続けているということでもあるが、環境への負荷をどう考えるか」などについても議論した。今後も、学生たちには、自分たちの活動を単純に「よいことをしている」ととらえるのではなく、さまざまな角度から問題提起し検討してほしい。

今年度の新しい活動として、小中学生を対象とした「国際的な問題を身近に感じてもらうワークショップ」がある。横浜市戸塚区の大正地区センターのご協力のもと、大正地区センターに隣接の学校に働きかけをしていただいて同センターで実施した。2017年7月には、小学生を対象に世界の飢餓や格差を体感してもらう「ハンガーバンケット」および中学生向けには「ジェンダー」、さらに2018年3月には小学生高学年向けに「フードロス」（食品廃棄）に関するワークショップを行った。学生たちは、小学生や中学生が「参加したい」と思うだけでなく、校長先生が学内での広報を許可し、そして親が自分の子どもたちの参加を許可・奨励するには、ワークショップの内容の充実以前に、まず企画書やチラシの書き方から工夫が必要だと学んだと思う。

前年度末の2017年2月、ユニクロなどを展開する株式会社ファーストリテイリングの店舗で、難民支援のために衣服を回収した。今年度はその活動の事後学習として、同社サステナビリティ部の方などを大学に迎え、同社のサステナビリティの理念や難民支援の活動などをお話していただいた。

今後も、学生たちには異なる角度から検討しながら、「聞き手」は何を知りたいか、聞き手に誤解を与えないかなどを考えながら活動してほしい。2018年度には、海外での活動も再開されるので、十分な準備をしながら現地での活動と国内での活動が相乗効果を生むよう、学生たちとともに工夫していきたい。

（ボランティアコーディネーター 中原美香）

●2017年度「海外プログラム事業部」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/18（火）・4/24（月）	新入生勧誘説明会＜世界を変える企画を作ろう＞
5/27（土）・5/28（日）	大学祭「戸塚まつり」でペットボトルキャップを回収 (5/27:2名、5/28:6名)
7/5（水）	「放課後大作戦」（運営学生8名、参加者29名） 戸塚区大正地区センターで地域の小中学生を対象にワークショップを開催 小学生:「貧困の差」をテーマにハンガーバンケット 中学生:「ジェンダー」をテーマにワークショップ
9/14（木）	事後学習会「UNIQLO×UNHCR 共同回収イベント『難民に服を送ろう』」 (7名) ※2017年2月に行われたユニクロ戸塚店での難民支援のための衣服回収プロジェクトの事後学習会。(株)ファーストリテイリングの方をお招きし、同社のサステナビリティ活動・難民支援活動を学んだ
10/5（木）～10/15（日）	「GIRLS Book Fair in MGU」(13名) ※国際ガールズ・デーにちなみ、女性問題に関連した書籍をSNSで紹介
10/26（木）・10/27（金） ・10/30（月）	ペットボトルキャップ回収イベント「Cap for Treat」 (10/26:3名、10/27:3名、10/30:3名)
3/7（水）	「フードロス鬼ごっこ企画」（運営学生3名、参加者6名） 戸塚区大正地区センターで地域の小学生を対象に「フードロス」をテーマにワークショップを開催

◇ペットボトルキャップ回収（5月、10月）

目的	・ボランティアを身近に感じてもらい、関心を持ってもらうため ・イベントを通して普段よりも多くのワクチンを集め世界の子どもたちの健康支援に貢献し、普段の回収活動の認知度も高めるため
日時、場所	2017年5月27日（土）・28日（日）、10月26日（木）・27日（金）・30日（月） いずれも昼休み、横浜キャンパス4号館ボランティアセンター付近
参加人数	5月27日（土）2名、28日（日）6名、 10月26日（木）3名、27日（金）3名、30日（月）3名

実施概要

5月の戸塚まつりでは主に地域住民を対象に、10月のハロウィンイベントでは横浜キャンパスの学生を対象にキャップ回収の呼びかけをし、収集した。5月、10月の実施ともにキャップを持ち寄ってくれた方にはお菓子をプレゼントし、キャップは860個でポリオワクチン1人分相当の20円になること、回収業者がキャップをリサイクル資源として売却した利益によってワクチンが作られることの紹介をしたりなどして、積極的に声かけを行った。5月は事前にもリサイクル協会の方との勉強会を行ってキャップ回収の理解を深め、10月はハロウィンにちなんで仮装を行ったりポスターを作って学生たちの興味をひけるよう努力した。事後にはキャップの個数を数え、キャップから作られるワクチンの量を計算しボランティアセンターに提示した。

感想・活動を通して得た学び

海外プログラム事業部の活動のなかでも、最も身近にボランティアを感じることでできる活動であり、また、最も地道に声かけを行った大変な活動でもあった。どちらの呼びかけでも大きな声を出し、ハロウィンの時には仮装をしたメンバーもいたため、恥ずかしさもあるなかでの回収だった。しかし、このような地道な努力が、海外の子どもたちにワクチンを届ける、という自分たちにとっては遠い存在の人々への支援につながる。これがボランティアの原動力にもなった。1人分のワクチンを作るのがどれほど大変なのかもわかり、ボランティアの根本的な活動を知ることができた。



今後に向けて

普段からペットボトルキャップの回収は行っているが、こういったイベント時はキャップの量を多く集めることができるし、呼びかけというボランティアの根本的な体験ができるいい機会のため、これからは戸塚まつり・ハロウィンイベントともに継続して行っていきたい。また、私たちがキャップを集めていることやその意義を学内でさらに広める方法を考えて、普段からもキャップ回収をより多く行っていきたい。

(学生メンバー 社会学部社会学科)

◇放課後大作戦

目的	小中学生の放課後を有効活用する
日時、場所	2017年7月5日(水) 15:00~18:00、大正地区センター(横浜市戸塚区)
参加人数	8名、小学生25名、中学生4名

実施概要

横浜市戸塚区の大正地区センターで、小学生・中学生を迎えてワークショップを実施した。小学生には食糧問題や格差について考えてもらう「ハンガーバンケット」、中学生には、男女の平等について考えてもらう「ジェンダーに関するワークショップ」を実施した。



感想・活動を通して得た学び

小学生が、身近な学校生活や家庭での行動を見つめ直し、世界的な問題の改善点を一生懸命見つけている姿にこの企画を実施した意味を感じることができた。小学生・中学生の参加者たちがワークショップを自分たちの日常生活にあてはめて考えてくれたことと、私たちが伝えたかった「食糧問題」「格差」についてももしっかり考えてくれたことが事後アンケートからも見受けられ、大きな達成感を得ることができた。

今後に向けて

今回の企画をきっかけに、次の企画を実施することになった。今回は、フードロス(食品ロス)問題を考えてもらうことを目的に、小学生を対象に「フードロス鬼ごっこ」を実施する。今回は、事前準備

が不足していたことが大きな反省点となった。今後の活動は事前準備を入念に実施し、内容をより充実させたい。また、世界規模で起こっているさまざまな問題を小・中学生たちと一緒に考えるきっかけをこれからも作っていききたい。

(学生メンバー 法学部政治学科)

◇フードロス鬼ごっこ企画

目的	小学生に楽しみながらフードロス問題を理解してもらう
日時、場所	2018年3月7日(水) 13:00~17:00、大正地区センター体育館
参加人数	3名、小学生6名

実施概要

横浜市戸塚区の大正地区センターに小学生を迎えてフードロス(食品ロス)鬼ごっこを企画したが、当日は人数不足のためフードロスに関するワークショップを実施した。日常生活で起きる身近なフードロスの事例を挙げながら、フードロス問題について考えてもらった。

感想・活動を通して得た学び

企画実施前に参加人数が少ないことが報告されていたので、フードロス鬼ごっこの準備と人数が少ない場合に備えてワークショップの準備もして当日を迎えた。企画自体の準備はうまくできたが、広報に準備不足を感じた。当日は人数が少なかったため簡易型のワークショップを実施し、余った時間をつかって小学生と一緒に遊ぶことで距離を縮めることができた。前回の企画に参加してくれた子が今回も参加をしてくれたので、企画を継続させる意味を感じた。

今後に向けて

今回は、広報活動にあまり力を入れなかったため参加人数が少なかった。大正地区センターの方からは、今後の活動についてのお話をいただいたので、次回は学生も大正地区センターの人とともに広報活動に力を入れていきたい。

(学生メンバー 法学部政治学科)

◇ユニクロ衣料回収プロジェクト

目的	海外プログラム事業部のメンバー一人ひとりが難民の定義や問題、CSR(企業の社会的責任)などについて勉強し、活動に参加することやお話を聞くことでより理解を深める
日時、場所	「UNIQLO×UNHCR 共同衣服回収イベント『難民に服を送ろう』」 2017年2月11日(土・祝)、12日(日) 11:00~17:00、ユニクロ東急プラザ戸塚店「講演会」 2017年9月14日(木) 14:00~16:00、白金キャンパス 1309教室
参加人数	2/11、2/12 ボランティア当日: 13名 9/14 講演会: 7名

実施概要

2017年2月11日、12日にユニクロ戸塚東急プラザ戸塚店で行われた、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)とユニクロが行っている衣料回収プロジェクト「難民に、生きるための服を。」にボランティ

アとして学生メンバー6名と一般の明学生7名が参加。事後学習としてユニクロを展開する株式会社ファーストリテイリングのサステナビリティ部の方やコーポレート広報部の統括部長に来ていただきサステナビリティ活動の一つである難民支援についての講演会を開催した。

感想・活動を通して得た学び

事後学習として実際にユニクロを展開するファーストリテイリング社のサステナビリティ部の方や広報部統括部長のお話を聞くことができよかった。私たちが調べていくなかで疑問に感じた「サステナビリティの定義とは何か」「服を届けることは本当にニーズがあるのか」などを質問することができ、理解がより深まった。また社会の一員として責任ある働き方を考える機会になった。

今後に向けて

今回のイベントを通して学んだCSR、CSRとSDGs（持続可能な開発目標）のつながりなどをより深く学びたい。イベントを開催し、それを学びにするためには、事前学習と事後学習がいかに大切かを改めて学ぶことができた。今後もメンバー一人ひとりが学びを得ることのできるイベントを開催し、その学びに海外プログラム事業部以外の人々を巻き込みたい。

(学生メンバー 国際学部国際学科)

◇GIRLS Book Fair in MGU

目的	女性問題に関する書籍の広報。「学校に行けない少女たち」をテーマとした本の書評をSNS上に載せ、学生に女性問題を身近に考えてもらうことを狙いとする
日時、場所	2017年10月5日(木)～10月15日(日)、横浜キャンパス
参加人数	13名

実施概要

世界の女性・少女が置かれている状況を知ってもらい、彼女たちを応援し、状況を改善するために国連が定めた10月11日の「国際ガールズ・デー」に合わせ、「学校に行けない少女たち」の背景にある問題をテーマにした明治学院大学所蔵の本11冊を選定。学生メンバーがそれぞれ読み、その書評を期間中1日1冊ずつ海外プログラム事業部のTwitter(@MGVC_kaigaip)にて発信。この企画の事前告知をTwitter、立て看板、三角POPで広報した。

感想・活動を通して得た学び

まず、学生メンバーそれぞれが女性問題に関する本の書評をしたことで、個人のなかで理解を深めることができた。また、Twitterというツールを使ったことは、少しでも多くの学生の目に触れ、女性問題に関心を持つきっかけとなる入口としてよかった。

今後に向けて

今回のSNSを利用した啓発活動は、比較的小規模にとどまってしまった。今後は、一時的な企画のみならず、日常でも女性問題に関する情報などを継続して発信していく必要がある。

(学生メンバー 国際学部国際学科)